（ⅱ）他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程が実現できているかどうか。

身に付けた知識や技能を定着させるとともに、物事の多面的で深い理解に至るためには、多様な表現を通じて、教師と子供や、子供同士が対話し、それによって思考を広げ深めていくことが求められます。こうした観点から、前回改訂における各教科等を貫く改善の視点である言語活動の充実も、引き続き重要となります。

4．まとめ

前述の（ⅰ）（ⅱ）は、

・学びは、知識を習得することに止まらず、それを活用し、自ら探究することで深まる

・他者と一緒に学んだ方が、考えも広がり、深まる

と要約することができます。

自分一人で分かったつもりになっていても、他者に説明してみたらうまく言えなかった、他者の話を聴いたら自分の気づかなかったことが分かった、そうした対話的活動を通して学びが深まるということになると思います。そして、ここで注目したいのは、学びが自らの「探究」につながっていくことです。知識を理解し記憶することも重要ですが、それを通して対象に対する「観」を形成し、その知識なり経験なりが「自分のもの」になることこそ「深い学び」と考えられます。

研修班だよりではこれまで「主体的な学び」「対話的な学び」、そして今回の「深い学び」について触れてきました。これらの三つの視点は、学びの過程としては一体として実現されるもので、それぞれ相互に影響し合うものですが、学びの本質の重要な点を異なる側面から捉えたものであり、授業改善の視点としてはそれぞれ固有の視点であることに留意が必要です。また、相互のバランスに配慮しながら学びの状況を把握し改善していくことも求められます。「主体的・対話的で深い学び」の実現とは、特定の指導方法や指導の「型」のことでも、学校教育における教員の意図性を否定することでもありません。また、今までの授業時間とは別に新たに時間を確保しなければできないものではなく、現在既に行われているこれらの活動を、「主体的・対話的で深い学び」の視点で改善し、単元や題材のまとまりの中で指導内容を関連付けつつ、質を高めていく工夫が求められています。日々の授業の中でお互いにがんばっていきましょう。

授業改善が表面的な活動に陥らないためにも「深い学び」の視点が重要となってきますが、その際にポイントとなるのは、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」です。学習の内容と方法の両方を重視しながら幅広い授業改善の工夫を実践していきましょう。

例えば、〇〇について授業で学び、生徒や大人たちとのディスカッション、さらには、教科書以外の書籍などを通して得たことをもとに、自分なりに「〇〇とはどういうことだったのか」という理解を得ることだと考えられます。